

来・ぶらり

RYUKOKU UNIVERSITY LIBRARY NEWS

龍谷大学
図書館報

No. 57

<https://library.ryukoku.ac.jp>

CONTENTS

- 01 巻頭言
- 02 学生に薦めたい、この1冊
- 04 大宮図書館にナレッジcommons開設
- 06 読売新聞東京本社のご協力による公開講座・講演会を実施
- 07 龍谷大学図書館新企画「本を語る夕べ」
- 08 滋賀県大学図書館連絡会開催～発足の経緯と内容～

<TOPICS>

第六回「私のお薦め本コンテスト」表彰式



受賞者の皆さんと審査員

図書館では、学部生・短大生の皆さんを対象とした第六回「私のお薦め本コンテストー My Favorite Book ー」を実施しました。

今年度は、22篇の作品の応募があり、大賞1篇と優秀賞3篇が入選となりました。表彰式は、12月22日(金)、深草図書館B1階ナレッジcommonsで行われ、受賞者のみなさんに図書館長から、表彰状と副賞が手渡されました。

図書館HP〔<https://library.ryukoku.ac.jp>〕にて、館長講評文と受賞作本文を公開しています。

お薦め本コンテストは2018年度も実施予定ですので、皆さん奮ってご応募ください。

<大賞>

佐藤 涼平 (文学部 日本語日本文学科 2年)

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス著；小尾英佐訳、早川書房、1989.



ニューヨークの 図書館

国際学部 教授
松居 竜五

1990年代初頭、まだインターネットも発達していなかった頃のこと。大学の助手になったばかりの私は、初めて訪れた冬のニューヨークで、一人で道に迷って歩いていた。セントラルパークの西のハーレムと呼ばれる地域は、現在とは異なり、当時は極端に治安が悪いことで知られていた。

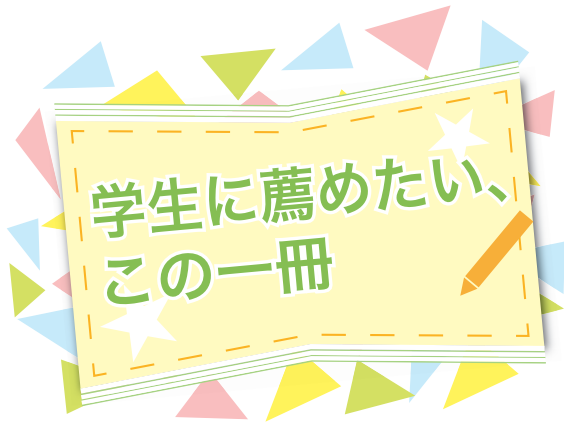
どうやらその危険地帯に踏み込んだらしい、と思った私は、地下鉄が何か避難できるような所はないかと、あたりを見回した。すると、大学生らしい一団を見つけたので、ついて行ってキャンパスの中に入ることとなった。そうか、コロンビア大学がこのあたりにあったはずだ、とその時気がついた。

寒かったので、学食が何か開いている建物はないかと探してみると、図書館を見つけることができた。日本人の大学助手だと身分証を見せると、簡単に中に入れてくれて、蔵書検索機の使い方まで教えてくれた。試しに日本語の本も置いているのではないかと思い、その「最新式」のコンピュータのキーボードでローマ字表記の日本語をいくつか試してみて、驚嘆することになった。

なんと、前の年に自分が出版したばかりの日本語の本が所蔵されていたのである。南方熊楠に関して二十代後半の私が初めて出したその本は、半年も経たないうちに海を越えて、地球の裏側の図書館にこともなげに置かれていた。比較的部数の多い選書の一冊とは言え、そんな研究書まで所蔵していることには驚かされた。

実は、コロンビア大学は全米有数の東洋学の拠点であり、日本語の書籍も日本の図書館なみに揃えられている。それどころかここにしかない日本語文献も数多く、日本の研究者がわざわざ調査のためにやって来たりする。だから私の本があったのもそれほど不思議なことではないだろう。その後、さいわいなことに数多くの自分の著作と、欧米やアジアの他の図書館でも遭遇することになった。

しかし、右も左もわからない当時のニューヨークにあって、初めて海外で自分の本を見つけた喜びは、それから三十年近くなる自分の研究生活の中で大きな励みとなり続けてきた。決して多くはないだろう彼の地の日本語学習者の中に、あの本を注文して読んでくれた人はいるだろうか。インターネットの時代となり、多くの書籍がオンラインで流通するようになったが、それでもモノとしての本を提供し続ける図書館の意義は、薄れていないと信じている。



『読書雑誌: 中国の史書と宗教をめぐる十二章』

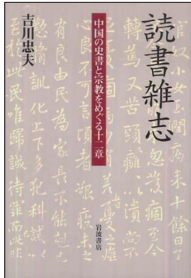
吉川忠夫 [著] 岩波書店 2010年



「ある書物の中のちょっとした記事が過去の読書の記憶を喚起し、そのことがさまざまに想念をひろがらせてくれるのは、読書の楽しみの一つである」とは、著者の吉川忠夫先生が、本書で述べておられるところ。本書は、これまで著者がさまざまな媒体に発表してこられたものを1冊にまとめられたものです。「書を読む」ということが、どういう営みであるのかについて深く考えさせてくれる書物です。歴史学を志す皆さんには、洋の東西を問わず、時代の新古を問わず、是非ご一読いただきたい書籍です。

文学部准教授 市川 良文

瀬田 本館 B1 開架
222/ヨタト
資料番号 31005004311



『データ分析の力: 因果関係に迫る思考法』

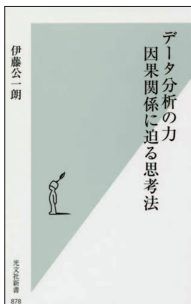
伊藤公一朗 [著] 光文社 2017年



これからは、データの時代と言われることがあります。遠くない未来では、人間でなくコンピュータ・AI (人工知能) が世の中をとらえ判断していくとも主張されています。本書は、まだまだ人間の役割が大きいことを教えてくれます。コンピュータが機械的にデータを分析しても、そう簡単には世の中の本質 (因果関係) は見えてきません。人間が頭を使って工夫してはじめて、意味あるデータ分析ができることも多いのです。本書を読んで、人間だからこそできるデータ分析のやり方を学びましょう。

経済学部准教授 新豊 直輝

深草 文庫・新書
081/コウフ/878
資料番号 11700003503



『喋るアメリカ人聴く日本人』

ハル・ヤマダ [著] 成甲書房 2003年



日米間のコミュニケーションはしばしば摩擦、誤解、そして失敗になってしまうことがあります。それはなぜでしょうか。父親の仕事により幼い頃から日本とアメリカに同等に住む経験を持つ文化コミュニケーションを専門する言語学者の著者は、この問題について実際のビジネスの場面において録音された会話データの分析により、コミュニケーションスタイルの違いを説明します。著者の説によると、コミュニケーションのルールが違うだけではなく、多くの場合ではそれぞれの言語におけるコミュニケーション実体が本質的に異なることが分かります。これからビジネスの世界に入る学生さん、ビジネスコミュニケーション、異文化コミュニケーション、国際関係、英語などに関心のある学生さんにお薦めします。また、英語の勉強のため、是非在館の原著も読んでみてください。



深草 8号館朗架図書
361.45/ヤハン-C
資料番号 10705062265

経営学部准教授 ホワイト・ショーン・アラン

瀬田 本館 1F 開架
361.45/ヤハン
資料番号 30300060861

『日本人はなぜ存在するか』

與那覇潤 [著] 集英社インターナショナル 2013年



常識として誰もが信じて疑わないものの見方や考え方を一定の方法論を用いて相対化するということが学問の力の一つですが、このことをまざまざと見せつけてくれるのが本書です。本書は、一見自明のものと思われる「日本人」概念を、いわゆる文系学問の様々な方法論を駆使して検討し、相対化するものですが、その語りは平易でかつ非常に面白く、学問への入門書としてまさにうってつけです。学問ってこんなに面白いのか!と感じていただける内容となっております。ぜひ手に取ってほしい一冊です。

瀬田 本館 1F 開架
361.42/ヨシニ
資料番号 31405032256

法学部教授 玄 守道

『世界の食料ムダ捨て事情』

トリストラム・スチュアート [著] 日本放送出版協会 2010年



この本は我々の日頃の暮らしの中で意図せず無駄にしている食べられる食料の廃棄問題について紹介しています。食品加工工場加工され、スーパーマーケット等の流通過程を経て、我々の食卓で消費される過程で、ごみとして廃棄されてしまう食べられる食料の「ムダ捨て」を生活者の目線でまとめた本です。一年生の基礎演習の研究テーマにぴったりの一冊です。

政策学部准教授 金 紅実



瀬田 本館 2F 開架
611.3/ストセ
資料番号 31005058841

『ビゴ―日本素描集』

清水勲【編】 岩波書店 1986年



ジョルジュ・ビゴ―の風刺画は、自由民権運動や日清戦争の図が歴史の教科書に載っているの、見たことのある人が多いと思う。しかし、一八八二年にフランスから日本にやって来たビゴ―が、ヨーロッパ人の目から当時の日本を描く際の視点の鮮やかさには、今でも驚かされるものがある。洋服を着ていばる政治家や官吏に対する鋭い批判や、江戸の情緒を残す庶民生活への郷愁など、絶妙な距離感で日本人の生態を活写したビゴ―の筆致をぜひ再発見してほしい。

国際学部教授 松居 竜五

瀬田 本館 B1 文庫
081/イワナ/2-556-1
資料番号 3050505596

瀬田 本館 B1 文庫
081/イワナ/2-556-2
資料番号 3924003584 ※深草は「2」のみ所蔵



『人工知能の核心』

羽生善治, NHK スペシャル取材班【著】 NHK 出版 2017年

『データ分析の力: 因果関係に迫る思考法』

伊藤公一朗【著】 光文社 2017年

『数学は役に立っているか?』

儀我美一, 小林俊行【編】 シュプリンガー・ジャパン 2010年



学生に勧めるこの一冊ということであるが、少し趣を変え最近読んだ2冊「人工知能の核心」羽生善治, NHK スペシャル取材班著と「データ分析の力: 因果関係に迫る思考法」伊藤公一朗著を勧める。前者では将棋界の永世7冠の目からみた AI の進歩と可能性に関する洞察力に驚かされる。後者はビッグデータの最先端の現場での活用についてわかり易く説明されており、両書とも文系理系関係なく今読んで欲しい本である。

もう一冊は「数学は役に立っているか?」儀我美一, 小林俊行著を勧める。数学の研究者として数学は役に立つのか? という質問をよく受けるが、それに企業トップの方々等が答えてくれる有難い本である。

理工学部教授 森田 善久



深草 文庫・新書
081/エヌエ/511
資料番号 11705000421



深草 文庫・新書
081/コウフ/878
資料番号 11700003503



瀬田 本館 1F 開架
336.1/キヨス
資料番号 31105002685

『ダイレクト・ソーシャルワークハンドブック: 対人援助の理論と技術』

ディーン・H・ヘブワース ほか【著】 明石書店 2015年



米国のソーシャルワーク大学院修士課程における教科書レベルの書物である。訳本で1,000頁弱もあるが、それでもアメリカの大学院では予習や授業で活用される基礎資料と考えた方がいい。しかしながら、日本の大学レベルの教科書はここまで厚くなく、また基礎資料とはいえアメリカの大学院レベルである点からも、龍谷大学の大学生にとっては十分に読み応えのある文献である。興味ある1項目だけでも読んでみてほしい。

社会学部教授 栗田 修司

瀬田 本館 1F 開架
369.1/ヘテウ
資料番号 31505034251



『うしろめたさの人類学』

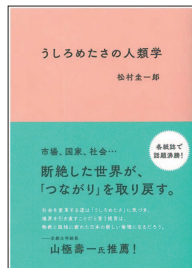
松村圭一郎【著】 ミシマ社 2017年



異文化にかんする本を読むと、わたしたちの常識はしばしば揺るがされる。そのようなもの見方が変わる経験をした後に、「これからどうすればいいの?」という疑問が生じるかもしれない。その疑問に対して、エチオピアの農村で調査をおこなってきた著者が、「贈与」というキーワードを切り口に向き合ってくれる(もちろん簡単に答えが出るわけではない)。世の中どこかおかしい、窮屈だと思っているあなたに、ぜひ手にとってもらいたい本である。

農学部講師 坂梨 健太

深草 和顔館開架
389/マケウ
資料番号 11705024681



『タテ社会の人間関係: 単一社会の理論』

中根千枝【著】 講談社 1967年



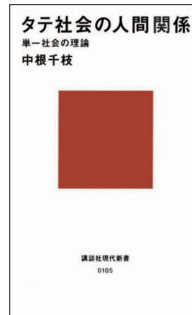
本書は、文化人類学者によって現代の日本社会を分析した本である。半世紀前に刊行されたとは言え、今でも充分通用する。学術書というより、一般人向けに個人間、個人と集団間、集団間の「関係性」に注目した興味深い新書である。さらに、従来の近代化論への反省、つまり「西欧にはないような社会現象を一括して、日本の後進性とか、封建遺制と説明する傾向が強かった」点に、果たしてそうなのかという視点で書かれている。読んでいて、実に小気味よい一冊である。

短期大学部教授 窪田 和美

深草 文庫・新書
081/コウタ/105
資料番号 10705006860

大宮 2F 開架図書
081/KOU/105
資料番号 20505026840

瀬田 本館 1F 開架
361.4/ナチタ
資料番号 39500061150



大宮図書館に ナレッジコモンズ開設

2017年9月11日、大宮図書館2階にナレッジコモンズを開設しました。元々そこにあった視聴覚資料室を移転し、その跡地(約100㎡)に設置されました。最大34名の着席利用が可能です。ナレッジコモンズでの使用に限り、プロジェクト等の貸出もおこなっています。

10名以上で利用の場合のみ閲覧カウンターで事前予約が必要ですが、それに満たない人数での利用は空席があれば適宜できます。ナレッジコモンズ内では蓋付き飲料の持ち込みと飲用が可です。



オープニング 図書館長挨拶



オープニングイベント 実習



オープニングイベント 実習

9月22日13時から16時までオープニングイベントを開催しました。新田図書館長の御挨拶の後、和装本等の修復で著名な株式会社大入の太田部長、長藤様、大橋様の実演指導「和装本のメモ用紙をつくろう」というテーマ実習を2部入替制で実施しました。前後半あわせて13名の方々が参加されました。和装本を多数所蔵する大宮図書館ならではの企画でした。

参加者の皆様からは「和装本の作りがよくわかった」、「作業時に役立つ」などの声が寄せられました。

実習に際しては、株式会社大入より実際に使用されている道具を持参頂き、一部は展示頂き、一部は実習で実際に使用して頂きました。

和綴じに使う糸は相当高価なものを使っていることなど参加者(利用者)の皆様には、詳しく知らなかった和綴じ本の一端を知って頂けたと思います。

12月7日の2講時には、ナレッジコモンズで大学講義を実施しました。

この講義公開は、仏教学を専門とされる岡本健資先生(政策学部准教授)の御協力により、実現したものです。【仏教学特殊講義D2】「律蔵に描かれる出家者の衣食住(特に住について)」の講義を頂きました。

岡本先生の御配慮で、多くの方々が知っていて馴染みやすい「祇園精舎」がどのようにして成立したのかという話の箇所を取りあげて頂きました。

受講者の皆さんが講義開始時点で割り当てられた箇所の読解をおこなうゼミナール(演習)に近い形式です。読みやその意味について調べる際、受講者の皆さんはナレッジコモンズと図書館内の同じ2階フロアにある参考図書コーナーから図



岡本健資先生の講義公開

書館内利用に限定される辞典等を館内で有効利用されていました。17名の方々が参加されました。

ナレッジcommonsを学習の場として活用すると、館外貸出不可で持ち運びにくい参考書等による調べものがしやすいことを参加者の皆様に実感して頂けたようです。



岡本健資先生の講義公開

12月21日(木) 17時から18時30分まで、「本を語る夕べ」(図書館長企画)が大宮図書館ナレッジcommonsで開催されました。

深草、大宮、瀬田の各図書館で本年度より企画開催されたもので、大宮図書館では、その最終となる第6回目の開催でした。

スピーカーは川添泰信先生(文学部真宗学科)が務められ、『こころの手足：中村久子自伝』中村久子〔著〕、春秋社、1999年を紹介頂きました。

同書のあらすじは、幼少期に四肢を病気で無くす状況下で、自力で生活をされた日本のヘレン・ケラーと言われた中村久子氏の生涯と信仰の記録です。

当日の参加者は、川添先生の他に10名でした。新田図書館長も参加されました。

川添先生からは、

- ・幼少期に御母堂様から読み聞かせを受けたことが、読書の原初体験であること
 - ・本を読んで涙を流したことがありますかという問いかけがなされました。(挙手された方は3名)
 - ・川添先生は、中村久子氏に子どもの頃、故郷で会われた記憶があること。
- そして、社会人になりたての頃、中村久子氏のこの本を読んで涙を流されたこと
- ・他にも様々な本を読んだが、読むのを挫折した本もあった経験があること
- などを話されました。

その上で、今回の本について紹介されました。

- ・中村久子氏は障がいがある中、自分でできることを自分でおこなわれたこと
- ・中村久子氏は直接会ったヘレン・ケラーに自分でつくった人形をプレゼントし、『私より不幸な人、そして偉大な人』とメッセージを受けたことなどをお話し頂きました。参加者一堂は静かに聴き入っていました。

参加者の一部の方からは、グループディスカッション的なことがあるかもしれない為、緊張していたが、ためになる楽しいひとときだったという声がかかれました。

「本を語る夕べ」はひとまず終了しましたが、今後こうした企画がなされた場合など、利用者の皆さんもよろしければ御参加頂き、新たな「本との出会い 人との出会い」を見つけて頂ければと思います。

また、大宮図書館でこうした企画が開催できるのは、新設されたナレッジcommonsのみです。

大宮図書館での企画開催時は、ナレッジcommonsに御注目ください。



本を語る夕べ(川添泰信先生)

読売新聞東京本社のご協力による 公開講座・講演会を実施

図書館は、読売新聞東京本社のご協力を頂き、下記のとおり公開講座・講演会を実施しました。

講師：読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局 専門委員 和田浩二氏

公開講座：「読書の楽しみ」 2017年12月18日（月） 13時15分～14時45分

公開講演会：「アクティブラーニングを推進する図書館」 2017年12月18日（月） 18時～19時

講師の和田浩二氏は、「活字文化推進会議」の事務局も担当されています。活字文化推進会議は、読売新聞社が出版関係業界と協力して発足させたもので、本や新聞などの活字文化を守り育てるために、様々な事業を展開されています。本学図書館が3年前から参加している「全国大学ビブリオバトル」、また本学図書館が今年度から京都府、滋賀県の各会場を提供した「全国高等学校ビブリオバトル」も、活字文化推進会議のプロジェクトとして行われているものです。

まず公開講座「読書の楽しみ」は、経済学部の新豊先生の2年生の演習のクラス生に参加頂き、図書館としては初めての公開ゼミの開催となりました。和田氏は、読売新聞社での自身の記者歴とともに、活字文化推進会議担当となって以降の様々な活動についても詳細に紹介いただきました。特に、著名な作家や芸能人を講師に招いた読書教養講座や活字文化公開講座の実現に関連した苦労話の逸話には、参加した学生も高い関心を持ったように思われました。和田氏からは、それぞれの学生に対して、読書歴などの質問もなされ、まさに双方向のやりとりがなされました。講座の後には、和田氏から「読書の達人と言える学生さんもおられましたよ」との感想も頂戴し、本学学生の読書力の向上に期待が持てる機会となりました。

続いての公開講演会「アクティブラーニングを推進する図書館」では、アクティブラーニングと大学図書館との関わりについて、他大学の具体的な事例（立教大学、城西大学など）も交えた紹介が行われました。アクティブラーニングは中教審の学士力答申以降に広く認識されたものですが、それは大学教育の改善を伴うものであるとともに、大学図書館のあり方にも大きな変化を要求するものでした。具体的には、ラーニングコモンズの設置に代表されるように図書館における学習空間のあり方が再認識されました。本学図書館でも、各館にナレッジコモンズが設置されたことは、そのような経緯によるものです。和田氏も、今後は整備されたラーニングコモンズを活用した学習支援サービスを図書館が積極的に行っていくことを強調されていました。

また和田氏は、今後の大学入試改革では、「表現力」「思考力」「判断力」の三要素が重要視されることからしても、ますます読書を通じた思考力や想像力の涵養が求められており、大学図書館の存在意義はいよいよ高まるとの指摘をいただきました。「大学図書館よ、もっとアクティブに」との締めくくりの言葉も印象的でした。

【活字文化推進会議】 <http://katsuji.yomiuri.co.jp/>



「本を語る夕べ」は、2017年からの図書館新企画で深草、大宮、瀬田の各館で合わせて6回開催しました。「本を語る夕べ」では、先ずスピーカーが本をもとにした様々な話題を提供します。そして、それをもとに参加者が、それぞれ興味・関心のあることについて、フリートークを重ねていきます。

スピーカーには、様々な学部の先生方に登壇いただきました。各先生からは、課題書的话题を越えて、ご自身が研究者になろうとしたきっかけ、本との出会いや自身の読書歴についてもお話いただきました。参加した学生にとっては、「大学での学び」についてあらためて気付かされる絶好の機会となったと思われます。

「本を語る夕べ」開催内容一覧

☆第1回

日 時：7月4日（火） 17時～18時30分

スピーカー：高橋進先生（法学部）

課題書：『ポピュリズムとは何か』

水島治郎〔著〕、中央公論新社、2016年

場 所：深草図書館 2階 グループワークルーム4

☆第2回

日 時：10月31日（火） 17時～18時30分

スピーカー：大前眞先生（経済学部）

課題書：『銃・病原菌・鉄：一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』（上、下）

ジャレド・ダイヤモンド〔著〕、倉骨彰〔訳〕
草思社、2000年

場 所：深草図書館 2階 グループワークルーム4

☆第3回

日 時：11月1日（水） 17時～18時30分

スピーカー：堀田知子先生（社会学部）

課題書：『幸せになりたければねこと暮らさない』

榊木宏〔著〕、自由国民社、2016年

場 所：瀬田図書館 B1階 ナレッジcommons

☆第4回

日 時：11月29日（水） 17時～18時30分

スピーカー：加藤博史先生（短期大学部）

課題書：『ルポ虐待：大阪二児置き去り死事件』

杉山春〔著〕、ちくま新書、2013年

場 所：深草図書館 2階 グループワークルーム4

☆第5回

日 時：12月7日（木） 17時～18時30分

スピーカー：石田徹先生（政策学部）

課題書：『共生保障：「支え合い」の戦略』

宮本太郎〔著〕、岩波新書、2017年

場 所：深草図書館 2階 グループワークルーム4

☆第6回

日 時：12月21日（木） 17時～18時30分

スピーカー：川添泰信先生（文学部）

課題書：『こころの手足：中村久子自伝』

中村久子〔著〕、春秋社、1999年

場 所：大宮図書館 2階 ナレッジcommons



滋賀県大学図書館連絡会開催 ～発足の経緯と内容～

2017年12月13日に第34回滋賀県大学図書館連絡会が、本学瀬田図書館を会場として開催されました。

この連絡会は、滋賀県内の高等教育機関の図書館（大学等の図書館、情報センター）の振興を図るとともに、会員館職員の資質向上及び会員館相互の親睦を期すること、合わせて滋賀県内の図書館活動の振興に寄与することを目的とし、2000年12月21日に設置されました。

連絡会の目的を達成するため、1) 大学図書館相互間の協調提携、2) 大学図書館活動の研究調査、3) 滋賀県公共図書館協議会等との連絡調整、4) その他必要と認める事業などを行っています。

この連絡会の発足以前には、滋賀県内の図書館の連携組織として「滋賀県国公立大学・公立図書館事務連絡会（4図書館）」（1987年1月発足）がありました。その後、龍谷大学瀬田キャンパス（1989年）や立命館大学びわこ・くさつキャンパス（1994年）の開設などが行われ、2000年12月には、滋賀県内に11の大学図書館が設置されていました。このため、「滋賀県国公立大学・公立図書館事務連絡会」を発展的に解消し、地域連携を協議するものとして県内の国公立大学・短期大学で構成した「滋賀県大学図書館連絡会」が発足しました。

連絡会は、現在12の会員校と賛助会員で構成し、年2回開催され、様々な協議事項、承合事項や報告などを行ない、会員相互の連携を図っています。

今回の会合では、「雑誌の配架」、「入退館ゲートシステム」、「製本雑誌の選定方法」、「図書館内の禁止事項の確認」、「蔵書点検方法」、「機関リポジトリ」などについて、各図書館における運営や取り扱いなどの意見交換を行いました。

特に今回の議論で利用者に関するものは、「館内の禁止事項、製本雑誌の選定方法、蔵書点検方法」でした。「館内の禁止事項」では、各大学の運用や取り組みなどを確認しましたが、どの大学図書館も飲食や蓋付き以外の飲み物の持ち込み、携帯電話の館内での通話使用を禁止しています。「製本雑誌の選定方法」については、学会誌・商業誌など図書館で講読している雑誌を中心に製本している大学、専属の雑誌を永年保存とする大学や、予算の関係から製本を一切していない大学も少なからずありました。本学では、各学部学科で購入している雑誌は、購入希望者及び担当図書委員と相談のうえ製本の選定を行っています。「蔵書点検方法」については、龍谷大学が実施している「PC利用」による蔵書点検検索システムで、現在アルバイト学生でも容易に作業することができ、また蔵書配列にミスを少なくすることを心がけており、今回瀬田図書館ツアーに参加された図書館関係者の関心度も高く、各々の図書館でも導入したいなどの声もありました。出席者から、他大学視察を通し、日頃気づかない大学図書館の日々の運営の中から新しいものを発見したと相互に語り合っていました。



新田館長からの挨拶



図書館ツアー



蔵書点検システム説明

2017年12月現在の会員校

滋賀大学、滋賀医科大学、滋賀県立大学、龍谷大学、成安造形大学、立命館大学、滋賀短期大学、滋賀文教短期大学、聖皇大学、びわこ学院大学、長浜バイオ大学、びわこ成蹊スポーツ大学、滋賀県立図書館（賛助会員）